

『光村ライブラリー』を使って

― 私はこう扱いたい ―

奈良女子大学文学部附属小学校教諭

梶田 万理子

一 柔軟に取り扱える学習の場

これは、思い切った構想である。一年間の国語学習のまとめとして、子どもたちに培われてきた力を存分に発揮させようとしていることがわかる。しかも、手応えのある作品を集めているので、子どもたちの読む意欲は、十分期待できそうである。

また、取り扱い方に柔軟性があるので、教師の方も、これまで実践できなかった新たな発想で、子どもと向かい合うことができる。

例えば、この中に入っている「モチモチの木」や「ごんぎつね」「大造じいさんとガン」などを従来どおり、学級の子どもとぜひいっしょに読んでみたいというときは、いずれかの作品と交換することもできる。ある

と、自分の力で学習した成果を表現活動で発表し合う運びとなっている。その具体的な進め方も、学級の実態に合わせて弾力的に考えていけるよさがある。

二 私はこう扱いたい

ここでの学習の時間は、三、四年で十四時間予定されている。私は、三年生でこの時数を使って、次のように取り扱ってみたい。

学校では『光村ライブラリー』の十八巻を取り揃えているので、これらを有効に活用していこうと思う。この十八巻には、以前、教科書に掲載された作品の中から定評のあるものを取り上げて収録している。そこで、私の気に入っている物語を四つ選び、子どもたちに読み聞かせていきたい。すると、子どもたちは、教科書に載っている「モチモチの木」と合わせて、五つの作品に出会うことになる。それらの中から「いいなあと思った話」を一つ選んで、「やってみたいことを考えて、自分の力で学習を進めていきましょう。」と取り組ませたいと考えている。説明文は別な機会に扱い、今回は物語を中心に子どもたちの力を発揮させたいと思う。

今、私は二年生を担任しているが、時折この読み物シリーズから選んだ物語を子どもたちに読んで聞かせてい

いは、差し替えはせずに、もう一方の作品だけで、ここでの学習に用いることもできる。また、二つの作品に限らず、読書教材としてどんな本に触れさせ、自分の好きな本を一冊選ばせることもできる。学年によっては、テーマを決め、それに関連して本を読むことも考えられる。あるいは、教師の気に入っている作品の紹介を兼ねて、読み聞かせを取り入れながら、多くの作品に出会わせ、心ひかれた話を選ぶこともできる。このように一人ひとりの興味・関心に応じたり、学校や学級の実態に即したりしながらさまざまな取り組みが考えられる。

では、このように作品に出会った後、どのように学習を進めていくのかみてみたい。三年生から六年生まで学習のはじめに「今までの学習を生かして自分の力で取り組む」ことを前提に、参考となる学習活動が紹介されている。それによると、

三年 音読発表会やパンフレット作り。

四年 新聞やポスターを作ってしょうかいしたり、ぎもんに思ったことを調べたりする。

五年 自然や動物をテーマにした本の読書発表会をしたり、音読発表会をしたりする。

六年 感じたことを話し合ったり、文章にまとめて発表したりする。

る。「今の教科書には載っていないけど、もう少し前の教科書に載っていたお話だよ。みんなと同じ二年生が勉強したお話で、先生の好きなお話だから読みますね。」と言って「えいっ」や「王さま出かけましよう」などを紹介すると、「へえ、教科書に載っていたお話なの?」と、子どもたちは一様に驚きを表しながら、聞く姿勢に入る。また、「これは、三年生の子どもたちが読んだお話だよ。そして、この近くの奈良の小学校をモデルにしたようですよ。」と「太郎こおろぎ」を説明しようものなら、その歓声はさらに大きくなる。「教科書」と聞くと、子どもながらに何か気の引き締まった思いを持つのであるうか。

ところで、以前、五年生の担任から、「私は、『五色のしか』の話がすきだね。子どもたちといっしょに読みたいたので、前の教科書のどこに載っていたか探しておいてほしい。」と頼まれたことがある。その「五色のしか」も『光村ライブラリー』の第八巻に収められている。

実は、私もこの物語のことが心に残っていた。そこで奈良公園の鹿と身近に接している子どもたちに、鹿が登場する話として読んだことがある。すると、中には、「王様に捕まることがわかってるのに、堂々とその前に歩いていった鹿がいいなあと思いました。」と、感想を伝え

てくれた子どもがいる。何年生の教科書に載っていた話だからとこだわらず、その子その子の心に何かが残ることを楽しみに作品と出会わせていきたいと思う。

このように教師の思い入れがある作品を取り上げて、学級の子もたちと「いいなあと思ったこと」を語り合うのもいい時間である。私も一言、「先生も、逃げ隠れもしなかった鹿が立派だと思つよ。そして、王様もそんな鹿の姿を見て、男を叱ることができる人だったのよかったですと思つたよ。」と作品のよさを伝えることを忘れずに進めている。

さて、三年生の子もたちに読んでみたい物語は、今話題になっている「あらしの夜に」である。わくわくさせられるストーリー性には、奇抜ですごみさえも感じる。次に「手ぶくろを買いに」を取り上げたい。「本当に人間は、いいものかしら。」とつぶやく母さんぎつねの言葉は、温かい作品の中にも、鋭く心に残る言葉である。読み終えた後も、どこか忘れられず、考え続けている作品としても出会わせたいと思う。次に「五色のしか」を三年生にも読んでみたい。純真で正義感の旺盛な子どもたちに感動的な作品を紹介していきたいものである。四つ目は、「太郎こおろぎ」。がき大将の存在がいなくなったこのころであるが、ひと昔前の小学校のいい

雰囲気味わってほしいと思う。

これらの作品に一時間ずつ当て、私が読み終えた後には、「いいなあと思ったこと」を手短かに書くことを入れながら進めていきたい。そして、五つの中から一つの物語を選び、二丁三時間かけて、自分の学習をやりとげる「ひとり勉強」へと移りたいと思う。

三 学習方法を自ら工夫して取り組める子どもに

さて、選んだ作品で、自らやりたいことを決めて取りかかるとき、子どもたちはどのような内容を学習に取り入れていくだろうか。一体に、子どもたちがやってみたいことを決めるとき、それまで教師と共に活動してきた内容を参考にして考えることが多い。

私は、普段の国語学習から、作品に出会った子どもたちに「自分でやってみたいことを見つけて、ひとり勉強をしていきましょう。」と声をかけている。そして、「このお話を読んで、やってみたいこと、考えてみたいことが見つかりましたか。では、それを紹介してお互いの参考にしていきましょう。」と、まだどうしていいのかわ迷っている子どもたちが、友達の考えから、アイデアを生み出していけるように進めている。また、教師の方も、子どもたちから出されていない学習の内容やアイデアが

あれば、「先生だったら、こんなことをこのお話でしたいなあ。」などと勧めることも大事な働きである。ひとり勉強の時間を通して、子どもたちが自らの方法で作品と親しみ、作品に近づき、さまざまな表現方法を通して、その世界を楽しんでくれることを願っている。

しかし、鉛筆がなかなか進まない子どもたちが学級にはいる。その子たちが自ら動くようになるには、「このことなら、おもしろそうだからやってみたい。このことは、自分は気に入っているからやってみよう。」という思いを持てるまで、気長に付き合つことが大事である。さまざまな学習活動を体験させながら、その子が気に入った表現形式に出会うまで、根気よく働きかけていくと、いつの間にか、自信を持つてくるようになる。

八年前に受け持ったY君がそうだった。「モチモチの木」を読んで、何をしたいのか自ら決められない様子だったので、「登場人物とお話ししよう。」という会話文形式の学習を勧めると、殊の外興味を持った。そして、ひとり勉強で「豆太とほくの会話」を三場面にわたって進めた。それからというものの、この会話形式をどの作品にも取り入れながら、自力の学習をつくっていった。さて、次に、個々の取り組みをどう生かすのか取り上げてみたい。数時間かけて自ら進めてきた学習は、すで

にそれだけで大きな意味を持っている。子どもたちは、「一人でこれだけできた。考えられた。」と自分に自信を持ち、自らの力を実感し、満足感や充実感を持つことができる。まず、このことを互いに受け止めて、読み合ったり聞き合ったりする姿勢を持たせたいものである。

私は、子どもたちがひとり学習した中から一番紹介したい部分を決めさせ、所定の用紙に書き出させたいと思う。そして、それらを印刷し、学習に使っていきたい。お互いに読んで、学習した内容を受けとめ、尋ね合ったり聞き合ったりして、学び合つことができるようにしていきたいと考えている。この共同学習に四時間を予定したい。おそらく全員の内容に触れられないことも予想されるので、その折には、「一言感想」をシールに書いて手渡していく方法も取り入れたい。

私が三年生と学習してみたい構想は以上のようなものである。どの学年で実践するにしても、「自ら学び、自ら考える力」をはぐくむこの学習の場の主旨を、日ごろから意識し、子どもたちの心が弾むような、また進んで取り組めるような魅力ある学習活動を考え、一人ひとりの学習力を育てていく大事さを改めて思う。

